

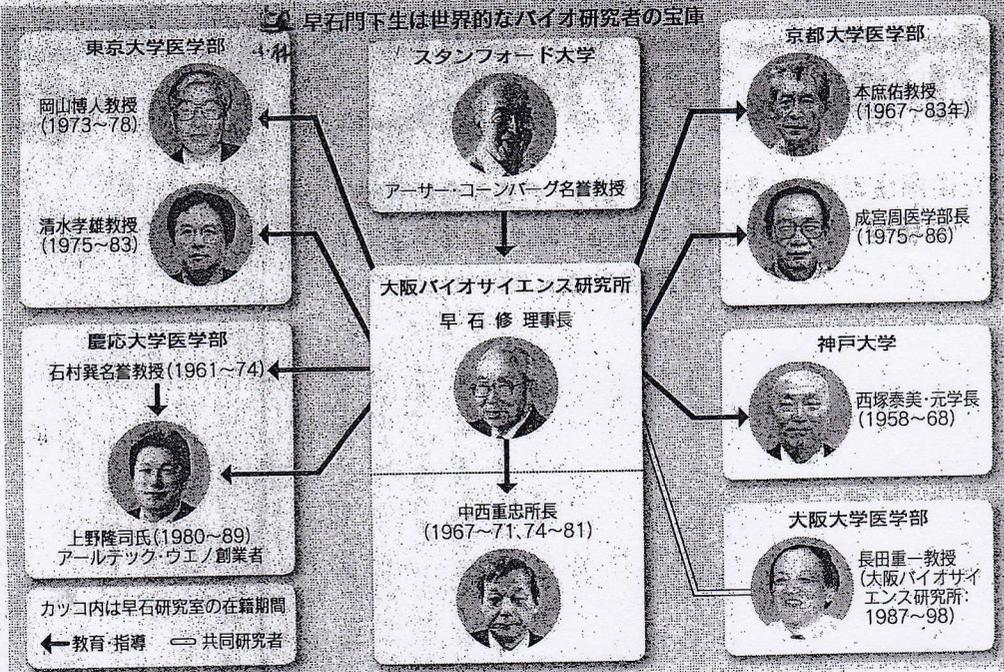
TCH ON MONDAY スイッチオン・マンデー



日本のバイオ率いる一門

今年もノーベル賞の選考レースが始まった。生理学・医学賞の候補に毎年挙げられる日本人研究者の源流をたどると、大阪バイオサイエンス研究所理事長の早石修(85)にたどりつく。

早石は大阪大学元学長の山村雄一と並び日本の生命科学の重鎮として活躍する京大教授の本庶佑(63)や、脳神経科学分野で有名



ノーベル賞候補 相次ぎ輩出

「道場」で徹底議論

「握り飯を食べたらおなかはいっぱいになるが、単にそれだけ。柿の種を土に埋めて育てれば将来、たくさん実がなる。握り飯より柿の種だよ」。終戦後まもなく早石は大阪大学の恩師からこう言われ、将来、大きく花を咲かせる可能性がある基礎医学の道を選んだ。その後、しばしば渡米。世界最大の医学研究機関である米国立衛生研究所(NIH)の部長に昇り詰めたが、一九五八年に帰国。三十八歳で京大教授に就任した。化学物質に酸素を加えて分解する酵素添加酵素の発見で世界的にも有名だった早石の下には全国から優秀な学生が集まった。

「大学院に入りた」という希望者がいるので、すべり口頭試問に来てほしい」。帰国直後、横浜のホテルにいた早石に一本の電話がかかってきた。汽車で八時間かけて到着した京大の面接会場には一人の学生がしょんぼりと座っていた。細胞のがん化に関する酵素を発見した元神戸大学学長の西塚泰美だった。「こんなに優秀な学生が日本にいないのか」と驚いた早石は、日本に帰ってきた選択が間違っていない

名な大阪バイオサイエンス研究所所長の中西重忠(63)ら、ノーベル賞候補が顔をそろえる。

武田薬品工業の中央研究所所長を務めた杉野幸夫や、塩野義製薬で副社長を務めた畑中正一(72)らに代表されるように、日本の製薬会社の首脳陣にも優

いなかったことを確信した。西塚は八八年に文化勲章を受章。米技術情報サービス社のトムソン社が独自に選ぶノーベル生理学・医学賞候補のリストに毎年挙げられていたが、昨年十一月に亡くなった。学部で二年生のころから早石研究室に顔を出し、西塚の指導を受けたのが本庶だ。九九年に免疫細胞だけに現れ、抗体の多様性を制御する遺伝子を発見。昨年、トムソン社が選んだ最先端技術領域で活躍する日本人研究者の一人に選ばれた。

西塚や本庶ら早石研から世界に通じる優秀な研究者が相次いで生まれた秘密は「早石道場」と呼ばれたランチセミナーにあった。学生や教授の区別なく、毎日一人が十二時から論文を紹介していく。論文に書かれていない実験方法の妥当性を徹底的に検証。自分が実験をするな

お風呂でも破れない本開発 真下 彪さん

「半身浴の時は、ぬれてダメになってもいい本を読みたいです」。ある女優のインタビュー記事を目にした「フロンティアアビセン」(東京・中央)の真下彪社長(66)にあるアイデアがひらめいた。

「風呂場でぬれても大丈夫な本を作る」

こうして誕生したのが、アクリルカードと同じ素材のポリ塩化ビニールで作った本「風呂で読む文庫百選」だ。水にぬれても破れず、特殊加工でページとページが張り付くこともない。昨年九月、「坊

「ちゃん」。「ロマオとジュリエット」など国内外の名作の発刊を開始。これまでに八十タイトルが完成し、計約一百万冊を売り上げた。

もともと印刷工場を経営していたが不況で三度も倒産の憂き目にあった。一九九五年に友人の援助で再起。テレホンカードや国際電話のプリペイドカードの印刷を手がけた。携帯電話の普及で先行きが不安が舞っていた。

そんな時、目にしたのが半

身浴の記事。自らは「からすの行水で風呂場で読書なんて考えたこともなかった」が、いつも印刷しているプリペイドカードの素材や技術が生かせるのではと思いついた。

試作本は「重くて肩が凝ってしまつ」と失敗から始まったが、メーカーにかけ合せて素材を限界まで薄くし、約二百五十枚の本で約三百と軽量化にも成功した。

文学集の次は子供向けの絵本を出版する。水に強い特長を生かし、登山者向けの地図やキッチンで使う料理本も計画中。「韓国からも引き合いがあり、ハンブルからも製作する予定」といふ。

らどうやるかといったことを実践に議論した。

このセミナーはNIHの恩師でノーベル賞受賞者のアーサー・コーンバーグ(87)から学んだ。本庶は「国際的に通用する研究とはどういうものか自然と身に付いた」といふ。東京大学の岡山博人教授(87)は「一流の研究とはどういうものか身ををもって知ることができた」と振り返る。

独創的研究者生む

八七年、早石は日本でいち早く研究者の任期制や研究評価制度を取り入れた大阪バイオサイエンス研究所の所長に就任。当時、東京大学医科学研究所にいた長田重一(56)を研究部長としてスカウトする。長田は九一年、細胞が自滅する細胞死の引き金になるたんぱく質とその遺伝子を発見。ドイツ最高の医学賞であるロベルト・コッホ賞を受賞するなどノーベル賞候補の常連になった。

早石研からはヒジネス界で活躍するユニークな研究者も生まれた。医薬品発明家を名乗る上野隆司(52)だ。脳内で作られるプロスタグランジンD2に睡眠を誘発する作用があることを世界で初めて発見した。上野はプロスタグランジンが分解されてできた代謝物には「医薬品になる資質があるのではないかと考え、アールテック・ウエノ」という製薬会社を設立。「論文ではなく、一般の人にわかる医薬品という形で自らの理論を証明しようと思った」といふ。

早石は大阪バイオサイエンス研究所の所長に中西を招き、自らは理事長となって、今も現役で睡眠の謎を解き明かす研究に日夜取り組んでいる。「敬称略(科学技術部 西山彰彦)